

アメリカにおけるキャリアガイダンス —ACT DISCOVERプログラムの紹介を中心に—

研究開発部試験環境研究部門 荒 牧 草 平

1. はじめに

筆者は、平成12年11月1日から12月15日の45日間、文部省（当時）の短期在外研究員として、先進的なコンピュータ支援型（computer assisted）のキャリアガイダンス・システムを開発しているAmerican College Testing（以下ACT）を訪れた。ACTでは、DISCOVERプログラムを中心としたガイダンス・プログラムについて、メディアの利用形式、データベース、検索システム、適性診断テスト、提供情報のデザイン、共通テスト成績と適性診断の結合形態など、サブシステムを含めたシステム全体の把握に努めた。加えて、高等学校やコミュニティ・カレッジ、教育委員会などを訪れ、カウンセラーや政策担当者等へのインタビューを行うとともに、学生を相手とした実際のガイダンス・カウンセリング場面も見学させて頂いた。ここではDISCOVERプログラムの概要を紹介する。

2. ACTが提供するプログラム

ACTは、独立の非営利組織であり、高校、大学、専門組織、企業、政府機関を対象に、様々なアセスメント、調査、情報提供、プログラム・マネジメントサービスを提供している。これらのサービスやプログラムの利用者は、毎年数百万人に達する。

提供するプログラムおよびサービスは、教育計画（Educational Planning）、キャリア計画（Career Planning）、労働力開発（Workforce Development）の3領域およびその他のサービスに大分され、その数は数十にのぼる。詳細はACTのWebページ（<http://www.act.org/>）をご覧ください。なお帰国後4ヶ月ほど経った時点で改めて調べたところ、プログラムの構成が部分的に変更されていた。以前にACTを訪れた方に伺っても筆者が滞在したときの内容とは異なっており、常に新しいプログラムが開発されていることが伺える¹。

なお、大学入学選抜の資料として、

¹ 実際、筆者の滞在中にも、複数のプログラムが開発途上にあった。

SAT (Educational Testing Serviceが提供) とともに広く用いられているいわゆるACTテスト (ACT Assessment Program) は、上記の教育計画プログラムの一部をなしている。なお、「教育計画」プログラムという言葉からも推察されるように、ACTテスト自体も単なる選抜の資料として用いられることを目的としているわけではなく、利用者が自らの学力を正しく理解した上で将来の教育計画を立てる助けとなることを目指されている。このことは、ACTテストが、8年生（日本での中学2年生）を対象としたEXPLORE、10年生（同、高1）を対象としたPLAN、12年生（同、高3）のうち就職を目指している者を対象としたWork Keysとともに、EPAS (Educational Planning and Assessment System) というプログラム群の一部を構成していることにも現れている。

3. キャリア計画プログラム

以下、DISCOVERプログラムについて紹介するが、このプログラムは、興味検査 (UNIACT)、職業関連能力の自己評価 (IWRA)、職業世界地図 (World-of-Work Map) など、いく

つかのサブ・プログラムによって構成されているので、先にそれらの内容について解説することとする²。なお、開発担当者へのインタビューによれば、これらのプログラムの開発哲学は、何千という選択肢を少数に絞る手助けをすることにあり、これらのプログラムを用いて進路を探索する過程で、自己理解を深めたり、未知の職業世界を発見するといった効果が期待されている。

UNIACT

ACTが開発した興味検査。1971年に初版が開発された後、77年には性別に関わらず利用できるユニセックス版が作成され、89年にさらに改訂が加えられている。ACTテストやDISCOVERを含むACTの9つのプログラムで使用されており、毎年の利用者は中高生320万人、大学生と大人を合わせて100万人（合計420万人）にのぼる。なお、UNIACTには、2つのレベルがあり、レベル1は8-12年生、レベル2は大学生以上を対象としており、それぞれ90項目の質問項目で構成される。なお、このプログラムの結果は「あなたは〇〇に向いています」といった評定の単なるリストでなく、次

² これらのサブ・プログラムはDISCOVER以外にもACTの複数のプログラムで共通に使用される。したがって「サブ・プログラム」という表現は厳密には正しくないが、DISCOVERを理解する上ではサブ・プログラムと呼ぶ方が理解しやすいと考えたため、ここではそう呼ぶこととした。

に紹介する IWRA とともに職業世界地図 WWM に図示される。

IWRA

職業に関連する 15 の能力についての自己評価。「空間把握力」「言語能力」など一般にテストで測定される項目ばかりでなく、「手先の器用さ」「リーダーシップ能力」など普通は測定されない項目も含まれている点が特徴と言える。自己評価であるため測定の信頼性という面では劣るが、自分自身を評価すること自体が、進路計画に重要な自己概念の発達を促進する効果があると考えられている。先に述べたように結果は単なるリストでなく UNIACT とともに WWM に図示される。

World-of-Work Map

個々の職業が「データ／アイディア」のいずれを扱い、「ひと／もの」のどちらを対象にするかという 2 つの基準に照らして、それらを空間上に配置した図。500 余りの職業が 23 の職業族にまとめられた後、図示されている。各職業族の空間上の位置から「各職業族の特徴」が理解でき、他の職業族との距離から「職業族相互の類似性」が把握できる。UNIACT および IWRA の結果は、唯一の適した職業としてではなく、WWM を 12 の職業領域に分けたうちの最も適した 3 領域として示される。

UNIACT や IWRA の結果が、「自

分に適した唯一の職業」でなく、WWM に図示されることのメリットは、①自分の「興味関心」あるいは「能力」が、現実の職業世界のどの領域に適しており、逆にどの領域からかけ離れているかを直感的に理解できること、②自分に適した領域の中には具体的にどのような職業群が含まれるのかわかること、③「興味関心のある領域 (UNIACT の結果)」と「能力に適した領域 (IWRA の結果)」にズレがある場合、どちらを重視してキャリア計画を立てるか判断するための資料となること等、自分自身に対する理解を深めながら将来のキャリアを探索するとともに、次第により現実的な計画へと導くように設計されている点にある。なお結果の読み方に関するマニュアルには、a. 23 の職業群を元の 500 余の職業に細分類した一覧表、b. 個々の職業に関する解説が記載されている『職業辞典』(労働省発行)の該当ページ、c. 個々の職業と高校での科目との対応表なども記載されている。

4. DISCOVER プログラム

CD-ROM として提供されるコンピュータ・ソフトウェア (Windows 版と Mac 版がある)。以下の 4 つの部分から構成されている；

HALL 1：自己とキャリアについて学ぶ

HALL 2：職業を選ぶ

HALL 3：教育計画を立てる

HALL 4：就職計画を立てる

HALL 1：自己とキャリアについて学ぶ

* 自分自身および長期の目標を作ることを学ぶ

・自分自身について学ぶ：「興味関心検査 (UNIACT と同じ内容。他社の同様の検査結果も利用可)」「職業に関連する能力検査 (IWRA)」「職業に対する価値観検査 (IWRV)」の 3 視点から自己を理解する手助けをする。

・キャリアについて学ぶ：発達の観点から人生における役割やその移行について学習

HALL 2：職業を選ぶ

* 労働省が作成した職業情報データベース (職業構造と労働市場の現状を反映するよう 2 年ごとに更新) から自分の希望を探す。以下 4 つの検索方法が含まれている：

・ HALL 1 の職業興味検査などの結果から適した職業を選ぶ。

・ World-of-Work Map から自分に興味のある職業を選んでいく。

・ 職業の条件 (領域、資格、雇用・労働条件など) を指定して検索する。

・ 直接検索：職業名、キーワード、専攻、軍務経験など

HALL 3：教育計画を立てる

* 教育計画に重要な 3 つのオプション

に関する情報提供。

・ 専攻あるいは学習プログラムの探索：

希望職業との関連／WWM／直接検索の 3 つの方法で検索可能。

・ 学校の検索：

・ 学校の種類 (職業・技術学校、コミュニティ・カレッジ、4 年制大学、大学院) からの検索。

・ 学校の特徴からの検索。

・ 学校名からの直接検索。

・ 奨学金など通学のための経済的援助プログラムの検索：

・ 「政府のプログラム」の検索。

・ 奨学金の特徴からの検索

・ 直接検索

・ 必要学費の推定プログラムの利用：自分の条件や希望を入力すると必要な学費を推定してくれる。

HALL 4：就職計画を立てる

* 仕事を探すための具体的方法の教示

・ 学びながら稼ぐ：伝統的な公式学校教育以外で職業訓練を受ける方法。徒弟制・インターンシップ・軍隊など。

・ 理想的な仕事の定義：雇い主、労働環境、労働条件等の好み。

・ 職業を探す準備の仕方：仕事の探し方・申し込み方法・封筒や履歴書の書き方。

・ インタビューに必要な準備の教示。実際のインタビュー場面をおさめた

サンプル・ビデオも含まれている。

5. まとめ

プログラム全体の特徴は、概ね以下の4点にまとめられる；

- ①発達のガイダンス：自分自身やキャリアを学びつつ情報検索しキャリア計画を立てられるよう設計されている。
- ②プログラムに含まれるデータベースが非常に豊富であり、かつ頻繁に更新されている。
- ③職業、専攻、学校、訓練機関、財政援助、奨学制度、軍隊など様々な角度からのガイダンスを想定している。
- ④利用者への配慮：情報の検索方法（メニュー画面、ハイパーリンク）や提示方法（マルチメディア：写真、ビデオ、インターネット）利用方法（個人ファイルへの結果の保存、必要カ所の印刷）がわかりやすく、利用しやすいように工夫されている。

このうち①は、個人の興味・関心・能力に適した進路選択を支援するという面で、今日の日本における個性・多

様性重視の初等・中等教育改革の動向と一致し、大いに参考になる。しかし、アメリカのように個々の職業の独立性が高い社会（極端な例では、レストランの給仕係と皿を下げる係が別の職業である）では適するとしても、時に「就職」でなく「就社」と評されるような職業構造を持つ日本において、こうしたガイダンスが上手く機能するか否か、また、どの年齢段階で測定するかにもよるが、個人の能力や興味をどれだけ「正確に」測定できるのか（信頼性と妥当性）等に関しては、検討の余地がある。

一方、②から④の特徴は、情報提供の適切さ・利用しやすさという面で学ぶべき点が多いと考えられる。また、これはプログラム自体でなくアメリカ社会の特徴だが、進学・通学のための経済的な援助が充実している点も注目に値する。日本の学費負担は家庭の経済状況に依存しており、経済的に困難な家庭の子どもは進学を断念しなければならない場合もある。奨学金などの経済的援助は、そうした事態を避ける上で非常に有効な方法であると言える。